

日本語では、「(西施の)顰(ひそみ)に倣う」と言い、他人の物まねをするおかしさをわらう時、また、自分の行為を謙遜して言う時にも使います。私なら、「三澤さんの顰に倣い、この原稿を書いています」というところでしょうか。日本では、どちらかと言うと、自分の行為を謙遜する時に使うことが多いように思いますが、中国では美人の西施に対して不美人の東施が、美人の真似をするおかしさを強調しているようで、舞台やテレビで演じられているのを何度か見たことがあります。

《莊子・天運》に出てくる話で、春秋戦国時代の昔、越ルオイェンの国の若耶溪という流れの西岸に施という家族が住んでいて、その娘が大変美しく成長したので「西施」と呼んでいました。同じ若耶溪の東側にも同じく施という家がありました。その娘は美人ではありませんでしたが、便宜上「東施」と呼んでいました。

東施は、自分が醜いのを自覚しているので、美しい西施の様子を見ながら、服装・お化粧・立ち居振る舞いを見習って、何とか自分を美しく見せたいと努力していました。ある日、流れの東側に渡って西施の様子を観察していると、西施は何か心配事がある様子で、胸に手を置き、眉根を寄せて考えを廻らせているようでした。村の人々はその様子を見ながら、西施がいつもより一層美しいと感じました。東施もその様子にすっかり魅せられて、西施の様子・動作を食い入るように見つめて、しっかりと頭に叩き込みました。

流れの東側に戻るとすぐに、西施の真似をして、胸に手を置き眉根を寄せて、西施の様子を思い出しながら必死の形相で歩き始めました。それを見た村人達は、東施のただならぬ様子に恐ろしくなり、皆家に逃げ帰っていききました。

《莊子》は、「美しい人が心を悩ませて、眉根を寄せて歩くから美しいのであって、美しくないものが、悩みも無いのに顔を顰めて歩いたのではますます醜くなるだけで逆効果である。うわべだけを真似するのは、何の意味も無く唯こっけいなだけである」と言っているのです。

この西施、中国四大美女の筆頭に挙げられますが、ほっそりした体つきで、身体から香気が立ち昇ったと言われ、彼女が湯浴みしたあとの水を周りの人は香水として利用したのだそうです。

越の田舎の貧しい家に生まれましたが、美しさを見出



イラスト：叶霖(Ye Lin)

され推挙されて越王勾踐の後宮に入りました。越が呉と戦って破れた後、彼女は、越王勾踐から呉王夫差に献上されました。これには越王勾踐の深慮遠謀があり、呉王夫差が西施の色香に溺れ、国政を疎かにして呉の国力が衰えるのを狙ったものでした。果たして、呉王夫差は西施の美しさの虜となり、呉の国内がみだれたところで越王勾踐に攻め込まれて呉は滅び、長年の呉越の戦いに決着が着いたことは皆さんご存知の通りです。

この事実を踏まえて、美しい人を「傾国」或いは「傾国の美女」と言うようになったのも先刻ご承知のことでしょう。

因みに、中国の「四大美女」と言うと、多少の入れ替えはあるようですが、一般的には、西施(春秋時代)・虞美人(戦国時代末)・王昭君(漢)・楊貴妃(唐)の4人を言うようです。時代によって美人の条件も変化していますが、4人に共通するのは、各時代情勢を背景に、千年以上を経た現代にまで語り継がれる悲しいドラマの主人公であるということです。

ここで蛇足を一つ。「東施」は「西施」に対する命名で、お話の中の「東施」は、『西施』ではない一般の人の意味で使われています。